

代表研究者	高田 知紀
研究テーマ	防災教育における知的資源としての妖怪伝承の再評価

<助成研究の要旨>

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、日本の各地に伝わる自然災害に関わる妖怪伝承を体系的に整理し、現代における防災教育での利活用方法を提案することである。前近代の人々は、何度も起こる不可解な自然現象や災害の発生を妖怪の仕業と捉え自らを納得させてきた。なかでも、自然災害に関する妖怪伝承は多数存在する。昔の人々は、様々な伝承により、地域の特性を理解し災害に備える知恵を住民たちが共有していたのである。本研究では、これらの伝統的な自然災害に関する捉え方を調査し、防災教育に利活用する方法を考察する。

2. 研究の方法

本研究は、民俗学、妖怪学などの文献資料、および「怪異・妖怪データベース」により、水害、地震、土砂崩れなどの自然災害に関する妖怪伝承を抽出し、それらの内容・特徴を、伝承の形態により分類して考察する。また、小学校低・中学年を対象とした「妖怪と地域の危険」をテーマにしたワークショップを実施する。

3. 研究の成果

(1) 自然災害に関する妖怪伝承の分類とその意義

水害と土砂・地盤災害に関する妖怪伝承を抽出し、分類した。水害では洪水・津波・水害・水難、土砂・地盤災害では土砂崩れ・地震・がけ崩れのキーワードを用いて抽出した。その結果、水害に関する伝承は 173 種類、土砂・地震災害に関する伝承は 73 種類となった。その結果として、前兆や教訓を表す妖怪が多く、災害当時の様子から危険を回避する方法や災害の脅威などを人々に伝えてくれていると推察できる。

(2) 妖怪を用いた防災教育の評価と成果

本研究では、プログラムを改善しながら計 4 回のワークショップを行った。ワークショップでは、妖怪は地域の防災活動にどのような役割を持つのかについて、「妖怪クイズ」を用いて説明した後、子どもたちが地域の危険な場所を探しその場所について、どのような妖怪が現れるか、妖怪はどのような悪さをするか、妖怪に襲われないためにはどうすればよいか、について地域を歩きながら考えた。最後に、考えた妖怪について絵や文字を用いて形にし、発表を行い、情報を共有した。妖怪を用いることで防災教育において子どもたちの積極性を見出すことができ、危険から逃れる方法を自ら考え、それを文字や絵で発信することにより子どもたち同士で共有することができていた。

4. 知的資源としての妖怪の再評価

本研究では、日本各地に伝わる妖怪伝承の再評価を基礎に、現代の小学生に対する防災教育における「妖怪伝承」の利活用方法についてワークショップを通して検討してきた。その成果として、図のような概念モデルを提案する。

図中に上向きの矢印が日本の妖怪文化ができたしくみを示す。人間が不思議だと思ったことを合理化するために妖怪伝承は存在した。これが「個別のリスク体験」である。そして人々が経験したリスクが共有され、同じ場所で同じ経験をした人が現れると、「共有化されたリスク」となる。さらに人々の間で共有化されたリスクの本質が表象化され、妖怪というシンボルが生まれる。こうして「リスクのエッセンスの表象化」という段階に至る。これが妖怪文化のメカニズムである。本研究で実践した妖怪安全ワークショップは、図中の下向きの矢印で示したように、妖怪文化の形成プロセスを逆にたどっていくものである。リスクのシンボリックな部分を「妖怪」を通じて考えることで、地域の共有リスクやそのリスクへの対応を主体的に考える契機を創出するのである。

